

広島県、芦田川下流域における オニバス自生地の消滅

橋本卓三

はじめに

芦田川は広島県東部の花崗岩地帯を流れる一級河川である。河自体は大きくないが、多量に流下する土砂のため河床が高く、かつては度々洪水を引き起して来た。下流の屈曲点には昔から砂土手が築かれ、これを切る事によって洪水調節が行なわれたため1930年代までは下流一帯の水害は年中行事の様であったと言う。又、高屋川下流域は以前、小さな巻貝の一種カタヤマガイが中間宿主である日本住血吸虫による風土病「片山病」の多発地帯として有名であった。

筆者は1986年秋に福山市街に近い千田町、千塚池にてオニバスを観察したが、その際、近くの人から芦田川下

流域のいくつかの溜池にもかつてオニバスの自生を見た事を聞かされた。現在、それらの自生地のほとんどは壊滅状態であり、地元の人々の記憶に残るオニバスに関して客観的な記録と言うものはほとんど無い。オニバス群落消滅の具体的過程がどの様であったか、今となっては正確にはわからないのではあるが、筆者は住民への聞き取り調査により、その概要を知る事ができたのでここに報告しておく。

当地域のオニバス群落は、そのほとんどが1970年代に入って溜池が特定業者により養魚池として使用されるに及んで、人為的に根絶させられたものである。

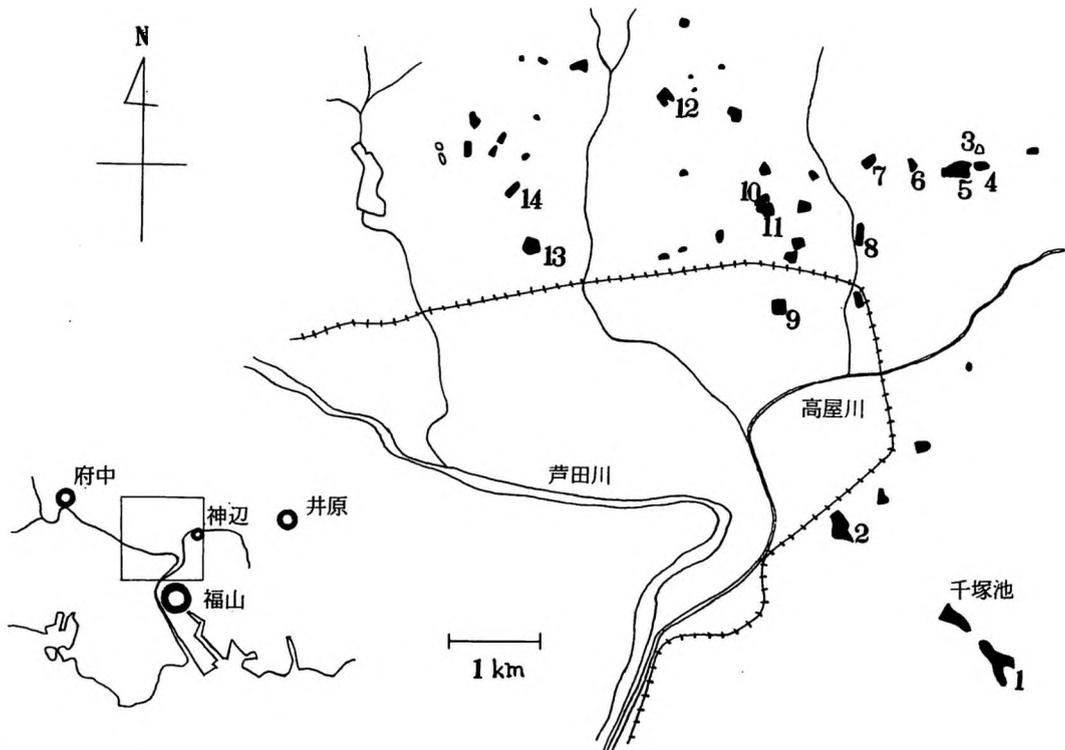


図1. 調査地

表1. 芦田川下流域の14のため池におけるオニバスの記録

○、見た記憶あり(右肩数字は調査年よりさかのぼる年数であり、最も新しい記憶を示す)。×、見ない、又は関心無く知らない。() 女性よりの聞き取り結果を示す。U、K、I : 養魚業者(現在使用していないものも含む)。名称は「池」を省略。なお、No. 3の溜池は1981年に埋められた。

No.	名称	聞き取り調査	推定消滅時期	池の使用者	
1	長	○ ²⁰	1970年代	U、ゴルフ場	
2	蓮	○ ³⁰ ○ ⁵⁰ ○ ⁴⁰ ×××○(○) ²⁰	"	ゴルフ場	
3	大葉	○ ²⁰	1970年代後半	U	
4	福田	} ○ ¹⁰	"		
5	小山		○ ²⁰ (○) ²⁰ (×)		"
6	中陣		○(×)(×)		"
7	箱田	(○) ^{<10} (×)(×)○ ¹⁰ ○	"	K	
8	梅木	○ ²⁰ ○ ²⁰	1970年代	K	
9	砂原	○ ^{<10} (○) ^{<10} ○ ^{<10} ○ ^{<10}	—————	K	
10	三ツ(新)	○○○ ¹⁰	1970年代後半	U	
11	"(古)	○○○ ^{<10}	(1980年頃)	U	
12	菱原	○ ^{<10} ×(×)○ ¹⁰ ×	—————		
13	小豆田溜	○ ^{<40} ×(×)○ ¹⁰	1970年代後半		
14	道城谷	○○ ¹⁰ ○ ¹⁰ (○) ^{<10}	1980年頃	I	

調査結果

深安郡、^{かんなべ}神辺町を中心とする芦田川左岸下流域で1986年秋に調査し、87年秋にも追加調査を行なった。大小を問わず43個の溜池(内1個は埋立てにより消滅していた)について60人(内、男40人)から話を聞いたが、その中で過去にオニバスを見て良く知っている人は35人(内、男28人)であった。対象者の年齢はほとんど50代以上と思われ、主として池の近くに住んだり、農作業に従事している人に面接し、可能な限りの記憶をたどってもらった。表1に過去オニバスの自生がほぼ確実と思われる千塚池以外の14個の溜池について調査結果を示す。これによると、当地域のオニバス自生地の消滅には主にU(神辺町湯野)とK(同、東中条)が関与した可能性が強いと思われる。前者はニシキゴイの、後者は釣りえさであるエビ、モロコの養殖業者であり、共に1970年代以降のレジャー産業の発展に伴い溜池を利用して事業を拡大して来たものである。養魚池におけるオニバスやヒシの除去は好ましくない雑魚や昆虫等の駆除と関連しており、ソウギョの導入と農閑期の落水、石灰散布と言うのが一般的な過程の様である。その様な池では仮りに養

魚が数年で終了したとしても、生態系の壊滅と多量の飼料投入に伴い、以後長きに渡って緑褐色に濁った水草皆無の状態が続く様になる。

調査地域内であつてのオニバス生育地として今でも多くの人の話に出て来るのはNo. 2、10、11、14等である。この内、No. 14(道城谷池、通称ハス池)について述べて見る。この池では近年までヒシやハスと共に全面に渡ってオニバスが繁茂し、近郷でも名の知れた場所だった様である。しかし、1980年頃に近くの養魚家がソウギョの放流によって水草を絶やし、5年間程コイの養殖を行なったとの事だった。現在では池上手の住宅から生活排水の流入もある様で、緑色の池面の所々にハスが見られるのみである。又、この下手にあるNo. 13では家庭排水の流入による臭気とヒシの繁茂がひどく、最近ソウギョを入れてきれいに掃除してしまつたとは、植生皆無の池を前に水利組合長が語ってくれた話の内容である。

千塚池について

調査地域の中で千塚池は現在では唯一、オニバス群落が毎年安定して出現する場所である。これは池が国有地

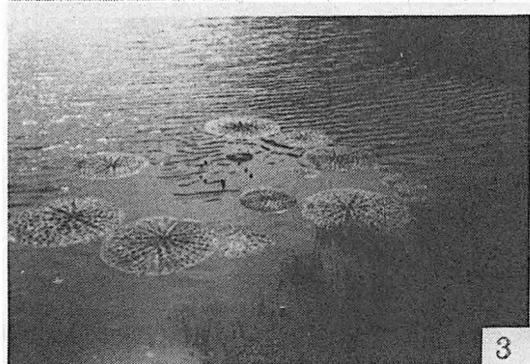
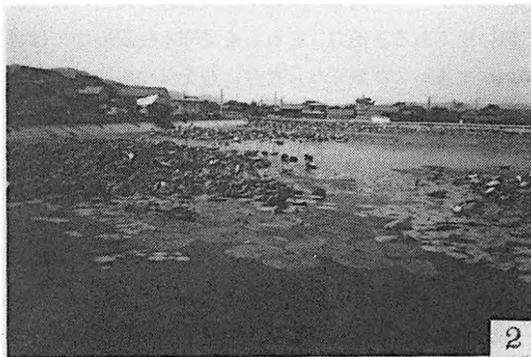
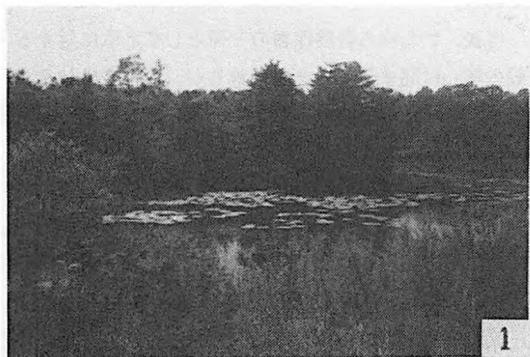


写真1. 菱原池 1987・10・13. 写真2. 砂原池 1987・10・13.
 写真3. 千塚池 "・"・10. 写真4. 三ツ池(古池) "・"・13. かつてはオニバスの
 ほぼ標準的な株。 名所として町の観光案内にも載った池である。

になっているため人手が加わりやすく、養魚も行なわれなかった事によると思われる。筆者が初めて調査した86年には8月にかかなりの水位低下があり、オニバスの個体数は多くなかった。87年には夏以降の雨量が比較的多かったせいか、春とちがって生育期の水色はかなり良く、前年に見られた様な全面的なアオコの発生は無かった。この年には千塚池では南岸を中心として生育の良い株が大変多く見られた。

本年88年は7月いっぱい雨が多くて池水の状態は更に良好であり、かなりの数のオニバスが確認された。この間、ヒシやスイレンにはさしたる変化は無かったが、ガガブタには大きな変化が見られた。86年にほとんど目に付かなかったガガブタが翌年には南岸の一部を中心としてあちこちに小群落を形成し、本年7月下旬には昨年以上の大きな葉を浮べて半抽水状に密生した所も見られた。溜池の水質や植生が場合によっては降雨量に大きく影響される事の一例であろう。現在、千塚池の南岸近く

では山陽自動車道の工事が進行しており、昨年は岸の一部に住宅と並んでキノコの生産工場が建った。今後、周囲の土地がどの程度まで開発されるのか不明であるが、楽観は許されないと思われる。

オニバスの保護

オニバスに限らず溜池の生物全般に対する住民の意識は本来、価値判断の埒外、即ち無関心と言ったものであったろう。水田耕作の鍵となる池水については重大な関心と細かな使用規則があっても、そこに存在する生態系に対しては保護などと言う考えも、根絶の必要も無かったわけである。ところが、一旦溜池が特定の者によって営利活動に利用される事になれば、限られた水面から最小労力をもって最大の利益を引出すべくオニバスをはじめとする水生動植物は害物として駆除の対象となってしまう。実はこうしたやり方は結局の所、初期の目的にはそぐわず、数年を経ずして養魚池が放棄される事も多い

のであるが、その辺りの反省や工夫と言ったものはまるで無い様である。他方、これらを見守る住民の中にはさすがにオニバスが無くなった今、昔をなつかしがる年配の人が多し。しかし、その復活、保護となると主体性のある意見はほとんどなく、時代の流れと言う所に落ちていてしまう。それでは若い人はどうかと言うと、オニバス自体を見た事は無く、かつての泳げる様な池も知らず、もはや溜池の管理にかかわる事も無く、たまに行く釣り以外ほとんど無関心と言うのが普通の人である。

種の絶滅の持つ重大な意味と言うものはなかなか解りにくいものかも知れない。日常諸事に対する判断の如く、全てが経済的な面から規定されるのであれば、世の発展につれオニバスが消滅するのは自然の成り行きと言う結論しか無く、我々もその様な考え方に無意識の内に慣らされて来ている。しかし、野生生物は一度消滅してしまえば二度と戻らず、生態系の退歩は永遠に影響を残すと言う事を考えると、なかなか甘い判断は許されないもの

である。

今後、いわゆる自然保護の一環として水草に対する一般の関心は高まるものと思われるが、これを単なる流行として終らせないためにもオニバスを初めとする貴重種の保護にはたす水草研究会の役割りは大きいであろう。筆者は未だ明確な解答を知らないのであるが、「オニバスの存在価値と、その保護の持つ意味」を一つの問題として提出しておきたい。その解決には国内のみならず、世界中の意識ある人々が注目しているものと信じる。

終りに当たり、調査に協力して頂いた60名の地元の方々に感謝します。

参考文献

- 橋本卓三 (1986) 福山市千塚池のオニバス。
水草研究会報 26号, 6-11
- 橋本卓三 (1987) 広島県深安郡一帯のオニバス自生地。
同30号, 9。

○神奈川県植物誌調査会編『神奈川県植物誌 1988』 (神奈川県立博物館、1988年3月、1442頁、頒価10,000円)

神奈川県下を108のメッシュに分け、150人をこえる方たちが9年間にわたり奮闘した調査の結果が、この大部な植物誌となった。県下に産する全ての植物について簡潔な説明、識別のポイントを示した図、そして標本によって裏付けられた分布図が載せられている。ここまで盛り込んだ県単位の植物誌は今まで例を見なかったものである。この調査を通じて集められた標本は12万点を越えるというが、その膨大な資料を整理してこの植物誌の完成にこぎつけるまでのプロセスも紹介しており、今後、このような企図を実現するための参考にならう。巻頭には32ページにわたるカラー写真、また巻末には神奈川県植物季節、植物研究史をはじめ、貴重な資料が収められている。

○筒井貞雄著『福岡県植物目録 1. シダ植物』(福岡植物研究会、1988年4月、516頁、頒価10,000円)

福岡県植物研究会は同県のフローラ解明のため、現地調査を重ね標本の蓄積を進めている。この度、その努力が実ってシダ植物の目録が完成した。第1部は標本目録

である。本書の基礎になった標本が全て引用され、各種についてその生態や分類に関する<ノート>が付される。第2部は標本図集である。これは標本を直接縮小コピーしたシルエット集であるが、変異の著しい種はいくつかの変異形を示すという配慮がなされている。第3部は分布図集。全種につき分布図(平面分布、垂直分布)が作成してあり、同県におけるシダ類の分布状況が一目でわかる。

これだけの内容をもつ植物誌を編むのは、時間的にも経済的にも、そして精神的にも並大抵のことではないだろう。先の『神奈川県植物誌』とともに、地方植物誌の双壁といえよう。続編に期待したい。

○J. J. Symoens ed. "Vegetation of Inland Waters" (Kluwer Academic Pub., 1988, 385p)

タイトルを見ると植生を扱った本のようなのだが、この本の内容は幅広い。11人の専門家が各章を担当し、水界の環境、その調査法、水中での光合成に関する章のあと、水生植物群落の構造に関する章がつづく。後半が植生を主題とした章だが、植生の記述というより、さまざまな対象やアプローチのもつ問題点を論じることが主となっている。